

やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2016.12.11

VOL. 70

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
関ビル106号 NPO新宿気付
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895
<http://www.tokyohomeless.com>

歩く

笠井和明

また、冬である。

今までのような支援の在り方と、対策の在り方も、
どうやら曲がり角に来ているようである。そんな冬
でもある。

これまでの残滓の中から何を生かし発展させるの
か、何を廃し、歴史に埋めるのか、まあ、これがな
かなか、それぞれの立場によって一致しておらず、
その混沌の最中にある冬と言って良いのだろう。

本来ならば、「基本計画」、「実施計画」の「見直
し」で、その時々の変化を嗅ぎ取り、対応の
変化を議論し、確定するのであるが、この国の「見
直し」と言うのは、経済原理や予算構成が話題の中
心で、それに倣って期待したり意見をしたりしても、
まあ、ほとんど変わらないと言う姿をつぶさに見て
来た。見直し時期にたまたま担当になってしまった

官僚様は、どうしても責任を取りたくないの、よ
ほど意識がない限り、有識者先生のご意見一応聞いて、まあ、とりあえず踏襲しましょう、ないしは、
費用対効果を考えましようと言うだけであり、方針
上の大きな変更はしないのが慣例のようである。

東京に限って言えば、先の概数調査において、都
内全域の路上生活者数の半分は河川敷に居ることと
なっているのであるが、都の対策、実施計画は公園
のテントが社会問題になっていた頃とほぼ同じま
まである。

河川敷で自活的に生活をしている人々に関しては
何か別な発想が必要だと思ひ、管轄外（新宿区には
当該すべき河川敷がない）ではありながらも、これ
までいろいろ提案はしてきたつもりであるが、そん
なものはもちろん採用もされず、彼らのニーズも調
査せず、まるで、現状を追認し、そのまま「共存」
と言う名の「自然減」を期待しているかのような姿
勢である。

それが対策と言われてしまえば、それまでである
が、それらの人々に対して、大変であるとか、どう
にかしてあげたいであるとか、迷惑であるとか、い
つまで共存すれば良いのか期限があるのか、それと
も永遠なのかとか、色々な意見や疑問のある都民は、
地域の目の前にある社会問題をテレビの向こうでな
く、実際の目で毎日のように見、これを一体どのよう
に解決したら地域のためになるのかを自然に考え続
けるのであるが、専門家と言われる誰もその具体的
な答えを出してはくれない。





うやむやになれる地域はそれはそれで、良いのかも知れないが、白黒つけなければ気がすまない、うやむやになれない地域ともなると、不毛な対立やら、不毛な議論やら、「正義の味方」の暗躍やら、それで商売をする不届き者であるとか、不毛な事柄が大きくなる。

「屋根と仕事」の対策は、何ちゃらファーストのように順位を決めるものではなく、置かれた状況や、生業、また、ニーズによって違うものであることを認識し、可能な限りの多様な選択肢を作るべきところを、地域ごとにそれをしてこなかった点である。また、そのための柔軟な見直しが真剣にやられて来なかった証でもある。

何を偉そうにと言われるかも知れないが、私たちが23年もの間、新宿の公園、路上を見、支援をがむしゃらに走り続けて来た今、ここから東京都や国の対策、計画を俯瞰した時、そんな風に思うのである。

昔のままのことを何の疑問も感じず、上辺だけの数しか問題にしてこなかったから、当事者の代や気質が変わり、時代も変わり、ニーズすら変わって来ていることへの着目があまりなされなくなる。マスコミも、支援団体も、また同じくである。

まあ、ある種の社会問題とは、よくよく考えて進めないと、そういう轍を踏み、社会が、誰の、どのような属性を持つ人々の支援や援助を、何の為にしているのかがその内に分からなくなる。そして、今は、そんな混乱の最中で、いつそれに終止符が打たれるのかすら分からない。

この問題の「解決」を、「路上からの脱却」したら「解決」と、社会はどうやら単純に考え過ぎてい

たのかも知れない。

色々なおっちゃんがいるように、ホームレス状態の人々が減らされたらこまる人も中にはいるようで、そこに小さな産業が出来ていたり、なんやかんやと雑然とした社会が作られてしまった面もある。「路上から脱却」したと思いきや、いつの間にやら戻って来たりと、そんな側面（制度のリピーター）も目立って来た。

その原因と言われる「貧困ビジネス」の指摘すら数多くの規制が入り、もはや時代遅れ、また、「アパート」が「脱却の最終地」と言うのも理想でしかなかったことが議論もされている。

「入れる箱」は、どんな「箱」でも入れてしまえば終わりであるが、その中身や、そこから先の関係性であるとか、生活支援、支援付住宅の中身などをしっかりと制度化していかなければ、入れられた人々に新たな困窮を強いるだけにしかならないのであるが、残念ながら社会の意識はそこにまで至っていない。

そんな都市の進化やら退化やら複雑さやらを考える時、問題の「解決」やら、「解消」やら、「発展」やらに、それ相応の時間がかかるし、腰を落着け取りくまなければならず、また状況は刻々と変わるのであるから、柔軟な改善が出来るよう、最初から想定すべきであったのだろう。

もちろん、何が「問題」なのかと言えば、自己責任であろうが、社会の責任であろうが、路上で暮らさざるを得ない人々を生み出し、その環境を作り出してしまった社会の「問題」なのであり、そして、そのような生活を余儀なくされた人々の本当の苦勞なり苦痛なりを「緩和」「解消」させるために社会が立ち上がることが、この問題の当座の「解決」の方向であると私たちは考えているのであるが、それを一貫して考え続けること、実践し続けることの困難もまた、感じている。

しかしながら、街は動く、時間も動く。北風も吹く。だから、私たちが何もしない訳にはいかない。

私たちの越年越冬は、もはや能書きではなくなってしまった。つまりは、特別なものではなく、日常の活動の風景でしかなくなったと言う意味である。

年末も、イベント的なものは最小限にし、一時保護の場所を可能な限り開けたり、臨時に作ったりしながら、巡回を続ける活動を、地域の中で行なう。

対象もまた少なくなっているのので、少数で賄える(筈である)。

二年前だかは、これを実験と称していたが、その段階は終わり、そこそこの出会いと、効果があるようなので、冬の日常に昇格されたようなものである。

新宿区のおっちゃん達は、先の8月概数調査(昼間の目に見える人口)で一年前の99名から140名へと反転したが、特段何かがあった訳ではない。

何もなかったにも関わらず、数値が跳ね上がるのは、分析のない数字の羅列情報なので、よくわからないところがあるが、対策が充実していたり、雑業が多い都市部には人も集まり易い。区界でそれは、行ったり来たりもする。もともと、新宿区の基礎数はもっと多いので、夜から昼へと現れ方が生活、就労スタイルの変化で変わるなんてこともある。

対策の効果はある程度数値化されるが、流入の度合いは、「関所」でも作らなければ数値化されない。固定した層が居ることを前提にするか、流動した層であることを前提にするかによって、こう云う数字は見方が変わる。なので、私たちはこの程度の乱高下で驚きはしない。

このような数字があがったとしても、新宿の路上は、誰かが期待する程、あまり大きな変化がなく、そのまま推移した一年であったと云えるだろう。そして、それは悪いことではない。対策も後ずさりしている訳ではない。必要な所には必要な措置がついており、しかも、新宿区には河川敷がないのと、公園テント生活者も居なくなったので、対象は限定され、対策がし易くもなっている。

苦情も、今や区内数カ所に限定されつつある。逆に区民、都民から苦情と云うのは「目に見えるホームレス」にとってみれば、一種の「サイン」のようなもので、そこを重点的に回り、必要な人々には必要な支援を行えば、苦情は少なくなる。そう云う構図は、既に出来上がっているおり、「巡回相談」であるとか役所系の巡回も、「パトロール」と称する民間団体の巡回も、巡る場所はほぼ固定化されている。まあ、こう云う場所のことを、「動物園化された場所」とも言い、そう云う場所が固定化されたのが、新宿のここ数年の特徴と云えば、特徴である。

生業もほぼ固定化されて来ているので、移動する必要のない者は、無闇な移動をしなくなっているようである。

概数調査をする立場からは、調査は簡単になった

のであるが、しかし、それに安住していると、またそれは変化したりもする。

あまり変わらないと云うのは社会からすれば退屈なものであるが、だからと言って急激な変化を求めるのも、何である。変わらない状況を生かし、その中で大きな声をあげずにコツコツと事とに当たるのは大切なことである。

日常活動の何が楽しいって、新たな出会いがあることでもある。新宿と云う地は、入るなどと言われても、新しい仲間が入って来る。全国各地からである。逆に言えば、全国に行かなくても、全国各地の話が新宿にいれば聞けるのである。それが偏った話でも、思い込みの話でも、おっちゃんやお兄ちゃんの生まれと、育ちと、そこで培った人生観は千差万別である。何が答えかも分かりはしない。そして、その混沌こそが楽しかったりもする。そう言う「元気」をもらいながら、私たちは施してはしない活動を、恩着せがましく、マスコミ連れではなく、淡々と行なう。

その昔、よくボランティア希望の人から、何をやれば良いのかを問われた。その都度、「何でも良いから話を聞いてあげて下さい」と言った。当事者から聞く話は、本当の話もあるし、嘘の話もある。困ったといいながら、困っていないこともあるし、その逆も然り。でも、話をしないで、上から書物の概念を当てはめたところで、関係は始まらない。

炊き出しなんかでも集まった何百名の人と、一人ひとり話などできない。だが、巡回は、一人ひとりに声をかけられる。

坍塌の新宿は、そうやっていかないと、こんがらがった糸はほどけない。

そう、思うのである。

耳を澄ませ、考えながら変化せよ、走れなくなったら、どこまでも、歩け、歩け。

さながら、「書を捨てよ、町に出よう」である。

(了)

1

ジングルベルの季節、こちらの活動は華やかさと程遠い。新宿の巷で地味におにぎりを運ぶ。贈り物と呼ぶにはつましく、汗顔の至り。

16年は波乱なく過ぎた。毎日曜日、二度のパトロールで会う野宿者は延べ平均230人。うち175がおにぎりの時間帯（17:00～19:00）。実数は150～225で増減し、それにつれ1～2個ずつ渡す。5～6月は平均15～25人多かった。救急搬送の同乗一回。把握している死亡は行き倒れ2、搬送後2、いずれも伝聞で未確認を含む。

表の活動と離れ、個別の取り組みを試みた。決まった男性の傍に段ボールを敷き、1～2時間寝そべる。通行人がどうかかわるか、垣間見える。

言葉の聞き取りと身体接触を目指した。発語は断片で、会話があやふや。指示を具体化し、応答がかみ合う。路上の支援で、体に触れるのは限られる。入浴や排せつの介助はまず起きない。歩行ないし車いす、タクシーへの移乗を密着し助けはする。拒否が弱まるよう、握手ぐらいから慣れておく。

参加するボランティアが減った。おにぎり作り、配りを最少で行う。活動は単調で、劇的といい難い。使命感や熱意ばかりでは、肩すかしを食う。要員間の親睦は偏しやすく、あてにならない。情緒におぼれず、支援者を支える動因を再構築すべきだろう。

唐突だが、信仰は候補の一つ。この時期、ホームレス支援は佳境を迎える。各地の団体が越年・越冬闘争と銘打ち、功を競う。キリスト教会は双璧、な

役重要を担う。衣食はもちろん、宿所や仕事まで当人らへもたらす。

『新約聖書』に興味深い場面がある。富裕な男が、イエスに尋ねる。どうしたら幸せな生涯を全うできるでしょうか。即答で返ってくる。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります」（「マタイの福音書」）。

イエスの教えは、合理性に根差している。物の豊かさは死の恐怖を消さない。その点で、持たざる者への恩恵は都合がいい。現実の対価が払われにくいぶん、あの世で得を期待できる。「…お返しは贈与者の善行として天国での救いという形で与えられると説き、イエスは贈与慣行を用いながら彼岸への準備としての善行（貧民への喜捨）を説いているのである」（阿部謹也『中世賤民の宇宙』）。

2

路上に労働の契機を刻もうと、支援者は雑業に注目する。身近に接し、そこからはみ出す層に気がつく。文字通りの無業種。その場合も、彼らが消費者であるのに変わらない。

世間一般で、消費は購入と結びつく。野宿では廃品が主原料、元手なしでそこそこいける。とはいえ、座してしのげるほど甘くない。「…実は廃棄食品捜しはそれはそれで一苦労だ。…キャリアが必要で誰が行っても拾えるものではない…」（生田武志『ルポ 最底辺』）。

仲間の案内で、歌舞伎町のファストフードを軒並み回った。数年で、ほぼ一生分のバーガーやポテトを食べた。その経験から、こう語る関係者がいて不思議でなく思える。「街の店内に並んでいる商品は、そのうち捨てられてテント村に流れ着く。毎日街で放出されるゴミたち…東京の真ん中の公園で、お金をあまり使わないで生きていける暮らしがここにはある」（いちむらみさこ「望むこと」/『現代思想』40-15）。

満腹になっても充足感は乏しい。不安と焦りが、



束の間の飽食に走らせる。詳細を明かすのは避け、若干の事情を記すにとどめたい。

- ・廃品はたいてい袋に入り、口をほどもき中を 探る。結び方は様々で、店員の癖が出る。固い結び目は難儀だが、破くのは拙速。
- ・店によっては防犯網を設け、引っかかると警備員が駆けつける。万一に備え、逃げ道と言いつきを用意する。
- ・開かれた場所は人が集まり、目立って策が講じられる。あるいは、縄張りを争っていさかいが生じる。
- ・多量の売れ残りはいれしき半分。経営がずさんな証しで、じき閉店の憂き目を見る。好条件は長続きせず、経路の分散と開拓が欠かせない。
- ・調達の極意は細く、長く。根気、洞察力、反骨心、機敏さが求められる。若さに有利な資質で、老身にはこたえる。

苦心の末の収穫は、漠然と感謝の念を抱かせる。人知を超え、都会の大きな循環が胃袋をなだめる。住空間についてもしかり、思わぬ素材が排出され、即席に用いられる。

河川敷の家屋を調べ上げたある人は、それを天然の果実、自然からの贈り物に比せるという。「まるで山に住んでいる人たちにとっての草木のように、都市のゴミを自然物のように捉えて家を作っている。それはある意味、東京にとっての自然素材の家ということになるのかもしれない」（坂口恭平『TOKYO 0円ハウス 0円生活』）。

3

他の物資と異なり、現金を道端に捨てる人はいない。遺失が基本、入手は運任せ。「昼間、毎日街を4時間くらい歩いているんだ。自動販売機につり銭の取り忘れが残っているか調べながら…多い日には800円くらいになることもある」（神戸幸夫、大畑太郎『ホームレス 自らを語る』）。

当人どうし融通できたら、そのほうが早い。ただ社交性と返済のめど、額の多寡が問われる。「酒の席での奢ったり奢られたり…ちょっとした金銭の貸し借りもある。しかし、それは、忘れてもいいような額に収まるものであるか、一方的にどちらかが債務を負うことがないように枠づけられている」（青

木秀男編『場所をあける！ 寄せ場 / ホームレスの社会学』）。

矛先をずらし、こちらへ打診のくることがある。支援者は案外堅く、こんな名目で断りたがる。「金を渡さないのは、私の海外での援助経験からして誤りとはいえない。その日暮らしが馴染んでしまった人は、小金が入ると往々にして飲んでしまったりギャンブルで使ってしまう」（風樹茂『ホームレス人生講座』）。

いちおう見識ぶって、原則にこだわってみせる。同時に、町場の支援は何でもあり、変節をもって旨とする。例を引きつつ、まとめておこう。

- ・交通費の入用は急を要す。仕事、面接、帰省などで徒歩圏外へ。新宿から都内、近隣の各所は即金を検討する。以遠の地は、福祉事務所と交渉を促す。
- ・上京間もなく、屋外の夜明かしが危うい者がいる。歌舞伎町のマンガ喫茶は、ナイトバックの相場2000円前後。安いカプセルホテルは倍近く。これらを上限に、自宅へ連れ帰る手間とはかりにかける。
- ・酒、煙草への出資は浪費と叱られそう。が、毎食代を肩替わりできない。し好品ほど小銭が効き、依存症さえなければ生活を潤す。
- ・目的は自己申告に基づく。真の偽詮索は役所に委ね、うそをつくのも才覚と心得る。究極は生存に伴うカンパとみなす。
- ・約2割の率で返金が。ニヤッと笑い、紙幣を差し出し「利子はつかないけど」とかいいながら。金融は貸すより、回収が難しい。まして相手は行きずり。これで結構、報われた気になる。



支援者が貸し渋る、本音は風聞を嫌ってだろう。うわさが広まり、大挙して押し寄せかねないと。実際は杞憂に終わる。野宿の世界は俗に「煙草一本が恩義になる」（中村智志『大いなる看取り 山谷のホスピスで生きる人びと』）といわれ、ことに金銭の無心は抑制が強い。もっと欲しがっていいはずなのに。

4

無頼な印象に反し、大概の野宿者は安穩を好む。お金と相性悪く、鬼門に当たる。収入の途が絶無だと、浮世離れに拍車がかかる。

窮地に陥り、役所の担当者が修復を図る。逸脱を防ぎ、社会につなぎとめる案を凝らす。その際、お金の持つ意味は大きい。「重要なことは、彼らが生活保護費で暮らしていくという現実感覚を失わず、ケースワーカーとの関係が維持されることである。お金は彼らの現実感覚の核になる」（須藤八千代『ソーシャルワークの作業場 寿という街』）。

保護が決まり、落ち着かない。受給の最中、原状へ戻ったりする。いわゆる施設に対する不満をよく聞く。同室者の性癖、外出の制限、加えてお金の問題。宿泊、食事、諸経費を引かれ、手元にわずか残るだけ。関連の分野で、つとに厳しい指摘がされてきた。

身障者の運動はある面で、盛んな独立志向が際立つ。家族と同世帯や施設入所ではなく、地域に居を構えること。公的な資格や事業所派遣によらず、旧知の介護者を頼むこと。経済的な裏づけとともに、これらをかなえる実感が増す。

あてがいぶちではおぼつかない。「お金といったものも施設の生活では…職員なり保護者に管理されてしまうのが当たり前のところであるから、金銭感覚も奪われて当たり前である」（日本社会臨床学会編『施設と街のはざままで』）。

お金が大事なものは、用途を自ら選べるから。その不足は自失に等しい。福祉は与えるが、奪いもする。最低限の生活と引き換えに、自尊心を削り取っていく。考えてみてほしい。ホームレスがケースワーカーの給料を賄い、雇い主になれば立場は躍進するだろう。

そうしたことのため、資金が潤沢に回る必要がある。貨幣を「現金」ならぬ、「現物」とするよ

うな。「…お金がなぜ特権化するかっていうと、希少価値だってみんなを誤魔化すからで…空気や水みたいはどこにでもばらまいてあれば、そんなもんじゃないもんじゃあないじゃんと思える…」（フェミックス編『ベーシックインカムは希望の原理か』）。

残念ながら、通貨の発行は統治機構が握っている。市民がやろうとすると最悪、偽造の罪に処せられる。中央銀行が緩和に踏み切っても、同じ権能で緊縮に転じられる。並の消費者は物を買って支払うたび、（無意識に）機構に従う。

ところが、ここに「買わない」という姿勢がある。どんな企業も在庫の山を恐れる。買い控えを懸念し、消費税増が見送られた。買わないことは、社会のあり方に影響する。

不買の消費者は期せずして日々、この道に磨きをかける。それは公共地の占有や集団野営以上に、彼ら向きの実践といえないだろうか。「…買うことを強制できる権力はないからです。流通過程におけるプロレタリアの闘争とは、いわばボイコットです。そして、そのような非暴力的で合法的な闘争に対しては、資本は対抗できないのです」（柄谷行人『世界共和国へ』）。

5

路上を巡っていると、旅をしているみたいだ。日常のすぐ横に、別の日常が隣接する。

主流社会の〈買うー売る〉に対し、ここでは〈買わないー贈る〉といった関係が重きをなす。「…野宿生活においては、他者と円滑な贈与関係を結んでおくことは、生活のリスクを減らす…贈られたものは受け取る義務があり、また贈られたものと同量ではなくても、なんらかの形で返礼をすることも期待されていた」（丸山里美『女性ホームレスとして生きる』）。

この種の関係に、支援者も巻き込まれる。活動の見返りが、物の形をとって寄せられ始める。専門を活かし、野宿者の飼う動物を診る獣医がいる。治療のお礼に集まる品目は多岐にわたる。「…わたしが野宿の仲間たちからいただいたものはいっぱいある。まず一番多いのは衣類関係…次に多いのは飲食物…かわいらしいメモ帳やセロハンテープ…アクセサリーもあった」（なかのまきこ『野宿に生きる、人と動物』）。

彼らの返礼は世相を映す。ファストフードと併せ、

ファストファッションの隆盛が循環を勢いづける。今や衣類は消耗品、季節ごとに買い替えられる。昨季の型落ちが街路に放たれ、回りまわってこちらへ届く。ある日の外出時、頭のとっぺんからつま先まで、そうやって贈られた服飾だった。シャツ、パンツ、下着はおろか、帽子や靴、カバンに及ぶまで。これぞ活動家の出で立ち、ストリートの装い、貧困ゆえの不買の連鎖。

惜しむらくは、ここでも福祉がつかずきの石となる。制度上、相互性を認めにくい構造がつかまとう。役割を職員と利用者で固定する、最たる仕組みがやはり施設。

重ねて、身障者の運動の知見から。「…施設では、明示的な空間に返礼なき贈与を見せつける。それは、『してあげているのだから、おとなしくしろ』というような支配の贈与となって、受け手に負目感情を抱かせる。しかも、施設では負目を起点にした自己贈与を許容しない」(深田耕一郎『福祉と贈与』)。

為政者は「共助」「共生」を唱え、社会の理想に掲げる。路上の贈り物は似て非なる。苦い現実とし

て、強迫的に繰り返される。寝床を空ければ、つながりが容易にゆるむ。その意味で「隣組」とも違う。積極的な手本にならず、かすかに足元を照らす。だからこそ、貧者の光学にふさわしい。底辺に光を投げるより、底辺を光としよう。

そんなのは夢想家のたわごとというかもしれない。で、いつもかあなたもご一緒に。「社会主義とは互酬的交換を高次元でとりかえすことにある。そしてそれは、分配的正義、つまり、再分配によって富の格差を解消することではなく、そもそも富の格差が生じないような交換システムを実現することであるのです」(柄谷、前掲書)。

贈与の一撃、ホームレス、その可能性の中心。メリークリスマス、マそして新年おめでとう。

新宿農場「越後いろりん村」便り

新潟県・松之山では稲刈りが終わり、そろそろ冬の気配が濃くなっている。とはいえ、晴れた昼間は秋の青空が広がり、山から届く風が心地良い。こんな穏やかな日はお昼寝しないもったない。まだまだ、みんなで改修している宿泊小屋には窓も外壁板も付いていない。なんせ冬には5メートルも雪が積もるところなので、それまでにやらなければいけない大工仕事は沢山ある。「頑張って大工仕事をやるぞ」と思いながら、寝転んで青空を眺めながら「来年は露天風呂も作りたいな」などと呑気に考える。

大工仕事は素人である。釘を打てば途中で釘があらぬ方向に曲がっていくし、ノコギリを引けば、壊れたバイオリンみたいな音色が聞こえてくる。曲尺が「寸」で計るものと「センチ」で計るものがあることも分からず、「寸」で寸法を測って、同じ数字を「センチ」の巻尺で板にあてて切るようなことをする。当然、板がピッタリ収まるはずがない。気分転換にと、薪割りを始める。コンクリートブロックを台にしてナタで薪を割っていると、台にしているコンクリートブロックが割れてしまう。「なるほど、そういえば空手家も正拳突きで簡単にブロックを割っていたな」と思う。

とにかく失敗の連続である。実はそれがすごく面白い。逆にいえば「なるほど」の連続である。釘と垂直にハンマーを打てば曲がらずに打ち込める。慣れないうちはハンマーを垂直に打ち込める姿勢を取るのが大切で、私の場合、できるだけ手首が動かない姿勢を重視する。ノコギリを引くときは板が動かないようにしっかり固定すればすんなりと切れる。自分で試行錯誤して「なるほどね」ということが増えていく。

知っている人からみたら「そんな当たり前のことだろ」と思われるかもしれない。なんせ、こちとら素人である。「当たり前のこと」が「なるほどね」になるのである。「当たり前のこと」を当たり前のようにやるよりも、「当たり前のこと」を「なるほどね」と思ってやる方が楽しい。素人の特権です。仕事が進むペースは遅いけど、少しずつでも頭と体で理解していくから、それなりに進化してペースも速くなっていく。そこで深追いはしない。素人は慣れてくるとケガするから、このあたりで本日終了。

夜になると風が冷える。宿泊小屋で寝ているととても寒い。小屋の中を見渡したら窓にガラスが入ってないから、そこから冷たい風が入ってくる。「なるほどね」。やはり窓がちゃんと付いていないと寒いな。明日は窓を付けよう。「なるほど、なるほど」と思いながら、毛布を頭までかぶる。(おそ松)



2016～2017

今年も新宿年越の営み

2016年12月29日(木)～2017年1月3日(火)

<ところ> 新宿区、及び周辺の路上

おにパト準備 29日～3日まで13時より高田馬場事務所
ミーティングは29日～3日まで16時より高田馬場事務所
餅つき大会29日(高田馬場事務所前)、年越し祭りは31日(新宿中央公園)、臨時宿泊施設も用意し、緊急搬送24時可。
あとはひたすら朝まで歩き回り、仲間の寝床を静かに支えます。

主催・新宿連絡会03-6826-7802

歩け、歩け、路上の果てまでも

新宿連絡会 会計報告

引き続きご支援を頂き、ありがとうございます。
 同じような日常活動を地味に続けていますので、何か変わったことがある訳ではありませんが、引き続き注目を下さる方々には頭が下がります。
 成果と言うものはなかなか出せないものですが、新宿の路上の人々の現状は悪くはなってはいません。その点だけをご安心下さい。
 衣類、毛布も定期的に提供し、シャワーサービスも年間通して実施しています。おにぎり提供など、食事提供事業も長野、新潟の生産物を活用しながら、これまた年間通して実施しています。
 冬は、より活動に集中しますので、引き続きのご支援宜しくお願い致します。

2016年度 7月～11月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	82,591
1 寄付金収入	1,510,145	事務用品費	3,190
		事務所費分担金	200,000
計上収入合計	1,510,145	衛生管理費	12,960
		支払手数料	113,572
II 計上支出の部		車両費	356,986
1 事業費		修繕費	86,400
弁当おにぎり事業	340,997		
越年越冬事業	0	計上支出合計	1,332,505
その他活動事業	0	計上収支差額	177,640
2 管理費		前期収支差額	△593,244
旅費交通費	32,500	次期繰越金	△415,604
通信費	103,309		

●活動カンパ 振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。) からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。